

87企画-10 金城 馨 展 11月10日㊥-12月6日㊥ (月曜休廊)

GALLERY  TAKUMI



ブスマー W180×L400×H45cm 1987

空間表現としての彫刻

金城 馨

彫刻のもつ物質的な抵抗感が、専ら作品の外観を量感のあるもの、あるいは塊を内包する閉じた表面という性格を強く印象させる方向に働く際、彫刻の物質性は結果的に表現を弱めるものとして作用するように思える。

いかなる表現も、現実存在する何らかのものに対する、人間の物理的な働きかけに起因する。従って、表現が成立するための前提となる物質を、表現においてネガティブな要素として捉えるのは、矛盾した考えである。しかし、表現を素材との関係のなかで問いなおす時、彫刻の直接的な物質性は重要な課題として浮かび上がって来る。既存する空間のパースペクティブの中に位置する彫刻作品が、視野にどう作用するのかということを、彫刻固有の手法である、マッサやテクスチャーを決定する素材の質感や、一個の塊として表われる形態を含めて、問いなおす必要がある。

何かを見るという行為は、純粋に視覚だけによるものではなく、可視領域外の要素を含んだ上で、視覚的な経験として成立する。つまり他の感覚や概念、記憶といったようなものが常に視覚を補足しているのである。例えばテーブルの上のペンを見るということは、視野の中心にある形態、その形状によって示される、ある機能をもった物として見るのみならず、様々な経験や記憶から特殊な意味を付加し、又、ペンがそこにあるという出来事をも見ている。この様に、見るという行為の中で、物体を骨格として、現象という肉付けを行ないながら、感覚の対象を意識の中で構造化していく一連の手続きが起こっている。このような眼の対象として、彫刻は、その形態によって表現された内容ばかりでなく、知覚の働きによって露に

される、重量感などの物質的な属性によって存在感が強められると同時に、表現された特殊な存在としての印象を弱められることになる。

彫刻は、浮き彫りという特殊な例をのぞいては、立体であるがために、絵画とは違った意味での多視点性を持っている。彫刻においては、正面というものは厳密には存在せず、見る者は作品の周囲をまわり、あらゆる角度から彫刻作品を見ることが可能である。連続する視野の流れに沿って、複数の視野によって捉えられた面が、意識の中で組み立てられることによって、作品の全体が量塊として認識される。この多視点性ということが、彫刻に独自の効果を与え、常に視野の中心にあって意識を緊張させる対象となる。しかし、それが閉じた形態の表面上に現われる現象にとどまる限りは、その作品は常に周囲とは孤立した存在としてあり続ける。

空間表現として彫刻を捉え直す際に、この多視点性を形態によって拡大することによって視野の中心を分散し、周囲の空間へ作用していく表現が、一つの可能性として残されているように思える。又、彫刻作品の物質性を決定する表面に対する配慮も同時に行なわれなければならない。台座が取り払われ、現実存在するものとしての印象が、より直接性を帯びようになった彫刻が、表現による特殊な物体としての性格を強めるための手段は、何も形態や表面の在り方という方向からでなくとも得られるものであるかもしれない。又、彫刻というジャンルを定義し、その枠内に固執することは、表現上での必然性とは成り得ない。しかし、自分の制作にあたって、この空間表現としての彫刻という課題が一つの手掛かりとなっている。